SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

白いリボン

2009年・ドイツ、オーストリア、フランス、イタリア合作ドイツ映画
配給／ツイン
144分

2010（平成22）年11月4日鑑賞	東宝試写室

Data

監督・脚本：ミヒャエル・ハネケ
出演：クリスティアン・フリーデル/レオニー・ベネシュ/ウルリッヒ・トゥクール/ブルクハルト・クラウスナー/ヨーゼフ・ゼアビヒラー/ライナー・ボック/スザンヌ・ロタール/ブランコ・サマロフスキー/マリア＝ヴィクトリア・ドラグス/ロクサーヌ・デュラン/レオナルト・プロクサウフ

みどころ

ドイツのミヒャエル・ハネケ監督が、パルム・ドール賞受賞も当然！というすごい映画を完成させた。お正月映画はこれで決まり！

時代は１９１３年、舞台は北ドイツの小さな村。教育と宗教を２つのテーマとして、支配者ＶＳ被支配者という基本構造の中にがっちり組みこまれた閉鎖的な村の中で、次々と奇妙な事件が・・・。なぜ、こんな事件が？この犯人は一体ダレ？

韓国映画『黒く濁る村』（１０年）にも共通する重苦しい雰囲気が本作の大きな特徴だから、ぐったり疲れることまちがいなしだが、観察の奥深さとストーリー展開の面白さはピカイチ。ちなみに、まちがっても、犯人の見つからないミステリーなんて・・・？などと言わないように。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■こりゃ、お正月最大の問題作！■□■

０９年のカンヌ国際映画祭でパルム・ドール賞、エキュメニカル特別賞、国際批評家協会賞を受賞したミヒャエル・ハネケ監督の本作が、２０１０年暮れから２０１１年正月にかけて日本で公開されることに。本作は１９１３年７月当時の北ドイツのある小さな村を舞台とした物語だが、２時間２４分の長尺であるうえ、多種多様な人物が登場する。それを大きく分ければ、①男爵家、②牧師の一家、③家令の一家、④ドクターの一家、⑤小作人の一家だが、そこにはそれぞれたくさんの子供たちがいるから、まず誰が誰やら人間関係を整理するのが大変。

また、何でもクソ丁寧に説明する傾向が強い近時のテレビドラマの延長のような邦画と

違って、ミヒャエル・ハネケ監督作品ともなれば、冒頭にドクター（ライナー・ボック）の落馬事故が、それに続いて男爵家の納屋で起きる小作人（ブランコ・サマロフスキー）の妻の転落死が示されるが、もちろん犯人はわからず、たちまち謎だらけ。こりゃ、お正月最大の問題作！

■□■よほど根性を据えて観なければ・・・■□■

なぜこんな小さく閉鎖的なそして一見平和的な村で、こんな事故（事件？）が起きるの？木と木の間に張ってあった針金は落馬事故直後に取り除かれていたから、故意にドクターを狙った犯人がいたことは明らかだが、一体誰がそんなことを？他方、小作人の妻の転落死は単に床が腐っていただけだから本当は事故死？それとも・・・？この２つの事件をみただけでも、去る１０月２２日に観た韓国映画『黒く濁る村』（１０年）と同じように、この村はどこかヘン？そう思わざるをえない。そして、その後男爵家の納屋で火事が起きたり、小作人の長兄マックス（セバスティアン・ヒュルク）によるキャベツ畑荒らしなどを見せられると、①階級の相違にもとづく支配と被支配の関係、②年齢差にもとづく大人と子供の支配と被支配の関係、③そんな中で必然的に生じてくる恨み、憎しみ、嫉妬、そんなさまざまな人間関係と人間感情が事件の背景にあることが少しずつわかってくる。

こりゃ、一時もスクリーンから目を離せない。ちゃんと観ておかなければ、誰が何のためにこんな行動をとっているのか、なぜこんな事件が起こるのか、それがわからなくなってくる。そう、本作はよほど根性を据えて観なければ・・・。

■□■テーマの奥深さにビックリ！第１のテーマは教育■□■

本作を試写室で観た私は、まずその中で描かれる２つのテーマの奥深さにビックリ！閉鎖的な村を舞台にした本作の第１のテーマは教育。現在の日本では、学校教育も家庭教育も社会教育もすべて崩壊状態だが、１９１３年７月当時の北ドイツの小さな村では家庭教育はきわめて厳格だし、本作の語り手となっている３１歳の教師（クリスティアン・フリーデル）による学校教育も厳格。さらに村全体がプロテスタントの信者だから、それを統括する存在である牧師（ブルクハルト・クラウスナー）の力はきわめて強く、この牧師の家庭における宗教的教育もきわめて厳格だ。

６人の子供をもつ牧師の家の家庭教育の厳格さは、ある日学校からの帰りが遅れたことによって、長姉クララ（マリア＝ヴィクトリア・ドラグス）、長兄マルティン（レオナルト・プロクサウフ）らが「白いリボン」の罰を受けるシーンで顕著になる。今ドキ、子供が学校から何時に家に帰ってくるかを厳格に問い、それが予定より遅れたことによって夕食抜きの罰や「白いリボン」の罰を親から受けるということはありえないが、あの時代、あの村ではそれが当たり前だったわけだ。

さあ、そんな教育というテーマで本作はどこまで村の問題点を奥深く掘り下げていく

の？それが第１の注目点だ。

■□■テーマの奥深さにビックリ！第２のテーマは宗教■□■

本作の第２のテーマは、宗教。この村の半分の小作人を抱える大地主は男爵（ウルリッヒ・トゥクール）だが、男爵が村を平穏に治めていくためにはどうしても宗教の助けが必要。したがって、村の支配者は経済的にはこの男爵だが、宗教的にはこの牧師となる。そのことは、収穫祭のお祭りの日にリーダーシップをとるのが牧師であり、男爵は牧師の音頭によって挨拶している姿からも理解できる。

さあ、こんな閉鎖的な村社会の中で、宗教の問題点はどこまで奥深く掘り下げられていくの？それが、第２の注目点だ。

■□■重苦しさと圧倒的迫力の源泉は？■□■

本作は、冒頭とラストのエンドロールが無音。それだけで多くの人は、目をスクリーンに集中することを余儀なくされるが、冒頭に展開されるドクターの落馬事件以下、すべての物語がモノクロ映像であることにビックリ。１１月３日に観た１９６０年のスウェーデン映画『我が闘争』が白黒の記録映像で構成されていたのは当然だが、今時こんなモノクロ映像は珍しい。とりわけ、色鮮やかでスピーディーそしてド派手な効果音のついたハリウッド映画に馴れた若者にはちょっとしんどいはずだが、このモノクロ映像を観ているだけで、この村の重苦しさがヒシヒシと・・・。

他方、本作では次々と起きてくる事件の中で、必ずしも村人たちの心が１つにつながっ

ていないことが明らかになってくるが、そんなストーリー展開の中に前述した韓国映画『黒く濁る村』と同じような圧倒的な迫力があるのは、一体なぜ？それは、１９１３年当時の北ドイツの小さな村では、地主ＶＳ小作人、牧師ＶＳ信者たち、父親ＶＳ子供たちの力関係が絶対であったため。つまり、そんなシステムに反逆することは容易でないため、次々と起きる事件は当然陰湿、陰険にならざるをえず、そこにかえって迫力を感じるわけだ。

本作で唯一明るく前向きなストーリー設定がされているのは、教師と男爵家に仕える１７歳の乳母エヴァ（レオニー・ベネシュ）との恋愛劇だけだ。この教師だけはこの村の村人ではなく、少し離れた村からやってきた３１歳の男。彼は一目見た時から惹かれたエヴァに恋心を覚え、結局結婚することになる。本作は教師のナレーションを通じて展開していくから、この教師だけは客観的に村と村人たちの行く末を見ることができたのかもしれない。そんな２人の恋愛劇を唯一の例外として、その他のストーリーはすべて重苦しいものばかり。しかして、そこになぜ圧倒的な迫力があるの？それをじっくり味わってもらいたい。

■□■こりゃビックリ　その１―ドクターの本性は？■□■

人間は誰でも表の顔（姿）と裏の顔（姿）があるものだが、閉鎖的な社会になればなるほど、裏の顔（姿）が隠され続けているのは当然。しかし、ミヒャエル・ハネケ監督はストーリー展開の中でそれを情け容赦なく剥ぎ落としていくから、その表の顔と裏の顔の違いにビックリ！その第１は、冒頭からいかにも紳士然とした雰囲気を漂わせ、村人のために貢献していると見えていたドクターの本性（裏の顔）。下の息子の出産で妻を亡くしてからは隣に住む助産婦（スザンヌ・ロタール）の助けを借りながら仕事を続けていたが、実はこのドクターと助産婦との爛れた関係とは？ドクター家の家事は亡き母親に代わって１４歳の姉アンナ（ロクサーヌ・デュラン）がやっており、同時に５歳の弟ルディ（ミルヤン・シャトレーン）の面倒もみていたが、ある日アンナの横顔を見て母親そっくりだと感じたらしいドクターの視線は？助産婦には知恵遅れの息子カーリ（エディ・グラール）がいたが、村の子供たちから邪魔者扱いされていたカーリが、ある日何者かに襲われ失明するかもしれないという大怪我を負うことに。こんなむごいことをしたのは、一体誰？さらにビックリしたのは、夜中に目を覚まし、アンナがいないことに気づいたルディが診察室の中で見た情景。なぜ、こんな夜中に父親と娘が２人で？「耳にピアスの穴を開けていただけよ。寝てなさい」とアンナはルディに諭したが、なぜアンナのスカートが膝までめくれあがっているの？そして、２人の息づかいは・・・？

セックス面におけるドクターと助産婦とのつながり、それに伴う（？）カーリの世話などはある意味想定内だが、「妻の死後、はけ口が欲しかっただけだ。もういいかげんうんざりだ！俺の前から消えろ」と命令するドクターの姿、それに戸惑いながらも「無分別な行動を取ったらどうする」と反抗する助産婦の姿を見ていると、ドクターほどの知的レベル

であっても、人間の性（サガ）はどうしようもないものだと痛感！

▪□■こりゃビックリ　その2―牧師の本性は？■□▪

聖職者たる牧師は教会に集うすべての信者たちの見本だから、常に正しい行いをしなければならないのは当然。したがって男爵以上に本作の主人公ともいえるこの牧師の生き方や行動は、本作の注目の的となる。ちなみに、本作の邦題『白いリボン』の意味は比較的早い段階で明らかにされるが、父親が自分の子供たちに対してここまで重い罰を課すことにまずはビックリ！また、６人も子供がいれば、さまざまな個性に育つのは当然だが、面白いのは小鳥をめぐって末っ子のグスティ（ティボー・セリエ）が父親へ示すごますり（？）ぶり。その展開はあなた自身の目で観てもらいたいが、果たしてこれはグスティの自発的な行動？それとも、鬱積した気持の形を変えた現れ？また、「白いリボン」の罰を言い渡された翌日、長兄のマルティンが小川の橋の欄干の上を手離し歩きしていたのは、一体なぜ？それは「神様に殺す機会を与えた」だけらしいが、こんな子供ですら「白いリボン」の罰を受けてそんなことを考え、結果的に「神様は、僕を殺したくないんだ」と悟るわけだが、それをどう解釈すればいいの？マルティンの姿を見てビックリし欄干から降ろした教師にその答えが見つからなかったのと同じように、私もただただ驚くことしかできなかったが、それは当然。

▪□■なるほど、１９１３年にはこんな意味が・・・■□▪

私は歴史が大好きだから、日清戦争が１８９４～９５年、日露戦争が１９０４～０５年、そして第一次世界大戦が１９１４～１８年ということが頭に入っているが、多くの日本人は遠くヨーロッパを中心に起きた第一次世界大戦のことは知らないかも。第一次世界大戦で敗戦国となったドイツは、ベルサイユ条約によって領土の割譲を余儀なくされたうえ、巨額の賠償金を支払わされることになり、それがその後のヒトラーとナチスの台頭につながることになった。しかして、一体何が第一次世界大戦の引き金になったのか？それを、あなたは知ってる？

私たちが歴史の教科書で学んだそれは、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子がセルビアのサラエボで暗殺されたこと。小さな村で次々と起こる謎めいた事件をめぐるミステリー映画と思っていた（？）本作では、ラスト近くになって「7月２８日、オーストリアはセルビアに宣戦布告。ドイツは8月１日にロシアに、２日後の月曜にフランスに宣戦布告した。」というナレーションが流れてくる。なるほど、本作の冒頭に描かれる１９１３年７月は、第一次世界大戦が始まる直前の年であり、この小さな村ばかりではなくドイツ全体に暗雲が立ちこめていた時代だったのだ。

▪□■犯人は誰だ？はじめて、その回答のない映画を・・・■□▪

本作は登場人物が多いうえ、たくさんの事件が次々と起こるからややこしいことこの上ない。しかも、それらの事件を警察に報告して犯人捜しの努力を本格的に始めるのは後半以降だから、ミステリー映画特有の「犯人は誰だ？」というテーマはないがしろにされた（？）まま、ストーリーだけが先行していく。そもそも、冒頭に見たドクターの落馬事故を発生させた犯人と、男爵の長男ジギ（フィオン・ムーテルト）への虐待や助産婦の知恵遅れの息子カーリへの暴行・傷害などが同一犯とは到底思えないし、そもそもそれぞれの事件の動機が不明だから、犯人捜しは大変。

そんな風に考えていると、２時間を経過したあたりで「犯人がわかった」と息せき切って走ってくる助産婦の姿が登場するから、俄然それに注目！「警察に説明にいくから、自転車を貸してくれ」と頼まれた教師は、その迫力に押されてやむなく自転車を貸してしまったが、教師がドクターの家に行くと「当分の間休業」の張り紙が。こりゃ、一体ナニ？事態が混乱する中、家令の娘であるエルナ（ヤニーナ・ファウツ）から「夢」の話を聞いていた教師は、ひょっとしてエルナが犯人？と考えたがさて・・・？さらに子供たちが関与しているに違いないと考えた教師は、クララとマルティンを詰問したが、それを聞いた２人の父親である牧師が怒ったのは当然。しかして、一連のさまざまな事件の犯人は一体誰？今はドクターから徹底的に迫害されている助産婦に、なぜ犯人がわかったの？

終映時間は刻一刻と迫ってくるが、結局それは明らかにされないまま第一次世界大戦が始まったことが告げられる。そして、村を追い出されてしまった教師も、１９１７年には徴兵され、終戦後は町で仕立屋を開業したらしい。犯人が明らかにされないミステリーなんて！それは「クリープのないコーヒーなんて！」と言えないこともないが、ミヒャエル・ハネケ監督は本作のラストをあえてそんな設定に。なるほど、こりゃ奥が深い。犯人捜しの妙味を突き詰めていくためには、2度3度と本作を観てじっくり考えてみなければ･･･。

２０１０（平成２２）年１１月９日記

入選すればすごい！もしダメでも・・・

１）３．１１東日本大震災は地震、津波、原発事故の三重苦に風評被害を加えると四重苦。１９８４年の大阪駅前再開発問題研究会への参加と阿倍野再開発訴訟の提起以降、都市計画やまちづくりをライフワークにしてきた私は、１９９５年１月１７日の阪神・淡路大震災発生後、震災復興まちづくりに取り組んだ。同年８月には『震災復興まちづくりへの模索』を出版し、芦屋中央地区のまちづくり協議会の「顧問弁護士」として現地での激しい「闘争」にも参加した。私の何よりの自慢は、震災直後の９５年2月１０日付朝日新聞「論壇」での「被災地復興は多様なメニューで」と題した提案。平時は平時のやり方でＯＫだが、非常時には何よりも大胆さとスピードが大切なのだ。

２）あの時、「無為無能」を自覚する（？）自社さ政権の村山富市総理は、震災３日後に新設した震災対策担当大臣に震災復興の権限をすべて委ね、「責任は俺が取る」と明言した。ところが、質量共にあの時の被害を大きく上回る今回は、菅総理と官邸の機能不全ぶりが顕著だ。

３)そんな中４月１０日付で朝日新聞が「ニッポン前へ委員会」を設立し、①東日本復興計画私案②これからのエネルギー政策という２つのテーマで広く論文を募集した。そこで私は「震災復興担当大臣を国民投票で！」と題する論文をまとめ、５月１０日の締切り直前に送付した。６月末までに提言をまとめる復興構想会議の議論は総花的でまとまりがないうえ、あの時の下河辺淳を委員長とした阪神･淡路復興委員会のような実務処理に長けた官僚がいないから、提言の実現可能性も怪しい。①住居は高台に移転を！②震災復興特区の創設を！③被災地全土の買い上げを！など誰が考えても当たり前の提言は無意味で、問題は誰がいつどのようにすれば、それを実行できるかなのだ。

４）その点、眠っている間に思いついた私のアイディアは、実行しようと思えばすぐにできる現実的な提言だ。国務大臣の任命は内閣総理大臣の権限だから、一種の人気投票のような国民投票で復興相候補者を選んでも、総理が現実に任命しなければダメ。しかし、国民の直接投票以上に強力な民主主義的裏づけは存在しないから、いくら「権力の権化」のような菅総理でも拒否できないはずだ。さらに私の提案の妙は、衆参ねじれ国会と政争の中で総理の首はすげ替わっても、復興相の首だけは替えられないこと。もちろん弁護士として提案の法的根拠はしっかり固めてあるから、入選すれば朝日新聞で是非その全文を。あっさり落選してしまえば、それはその時のこと。別途あらゆる方向にこのすばらしい提言（アイデア）を紹介し、広く社会や国民に問題提起していきたい。

２０１１（平成２３）年5月３１日記